



子どもが自分で乗り越えるとき

田中三保子

子どもたちは、それまでの生活の中から、すでに、価値観や生き方を小さいなりに身につけて入園してくる。

幼稚園という新しい集団に入り、異なった価値観や生き方に会って、それを自然に受け入れる子どももいれば、両方の価値観の間で揺れ動く子どももいる。

子どもは、この揺れを自覚しているわけではないが、遊びの中で、何とか解消しようと試みているのではないだろうか。そのことを改めて教えてくれるできごとに、私は出会った。

○閉じこめられる

年長組の十二月初めのこと、保育室では男児が三人、羽子板に焼絵をしていた。初めての経験で危なっかしかったり、うまくいかなかったりで、私は傍で様子をみていた。

「せんせい、大きいへやに来て」とE子が私を呼びに来た。「いいから来てよ。早く、早く」とせきたてる。しばらく焼絵の様子をみてから、私は走っていくE子の後を追った。

遊戯室に行ってみると、ワッフルブロックで細長い冊

いのようなものができている。

「おうちななの。R子ちゃんと作ったんだよ」

「ずい分大きいのができたのね。お玄関はどこかしら」

「ここだよ」

E子は言いながら、ブロックの一部をはずして示した。

「はいって」

「はいってもいいの」

「いいから、はいって」

「おじゃまします」

傍でR子がにこにこ見ている。狭い入口からもぐりこむようにして、私は中に入って座った。すると、E子ははずしたブロックを再びくっつけ、「はいった、はいった」とはやしたてるように言った。いつものように、何かもてなしを受けるものと漠然と考えていた私は、びっくりした。一瞬、何が起こったのかつかめなかった。E子はブロックのすき間から私を眺め、どこかへ行ってしまった。R子の心配そうな顔がブロックのすぐ向こうに見える。どうやら、私は閉じこめられてしまったように

ある。

焼絵の様子も見に行きたいが、E子は戻ってこない。私はちょっとむっとした気持ちになって、E子を待たずに出ることにした。せつかく作ったものだから壊さずに出るにはと考えて立ちあがると、囲いは案外低く、乗り越えたら簡単に出られた。R子がほっとした表情になる。保育室へ戻ろうとすると、背後からE子の声が出た。

「なんだ、もう出ちゃったの」

私はちょっと申し訳ないような気持ちになった。

「そう、出られちゃったの」

「なーんだ」

もう一度、E子はがっかりしたように言った。

保育室に急ぎながら、私はひどく後悔していた。理由はよくわからないけれど、E子は私を閉じこめたかったのである。私は抗ってしまった。E子の気持ちに沿うことがどうしてできなかったのだろうか。E子に感じていれば、また別の展開があったかも知れない。

○ E子と母親、そして私

E子は三歳からの入園児である。入園当初は母親から離れたがらなかった。好奇心が強いので、周囲の様子に気持ちが向いて、母親の存在を忘れたようになることがある。その間に母親はさっと帰ってしまう。母親がいないうちに気づくと、E子は火がついたように泣き、抱きとめようとする手を「ママがいい」と払いのける。日を重ねるうち、置いていかれることを恐れて母親にしがみつこうようになった。それでもやはり、面白そうなことに注意が向いて、一人残されることになる。E子が新しい環境に慣れるまで傍にいてあげてほしいと母親に頼んでみたが、小学生の姉を送っていかねばならないからと、応じてもらえなかった。母親は、E子の気持ちを思いやることより、事を順調に運ぶことを願っているように感じられた。

E子は泣きながら母親の姿を求め、廊下や玄関までも出ていく。姿のないことがわかると、地団駄を踏む。不

安というより、自分の気持ちを受けとめてもらえない母親への、苛立ちの表現のようにみえる。知らないおとなの慰めなど、受けつけられる状態ではないのである。かといって、そのままにはおけないので、いやがるのを抱き取り、興味のもとそうなものを探して歩く。泣いて抵抗していたのがだんだん落ち着き、自分から降りて遊び出すまで、私は毎日つき合った。

登園しても泣かなくなったE子は、砂場で遊ぶことを好んだ。茶碗に砂を詰めたものをいくつも作る。そして、いつも私に向かって言う。「先生なんかにあげないよ。」私なんかに簡単に心を許したりはしないと云っているような気がした。

六月の初めには、「先生はどうしてE子のことを無視するの」と言われた。E子については少々のことでは驚かなくなっていた私も、これにはさすがにびっくりした。

帰りの片づけの最中に「作って」と言われたことに對して、きょうは無理だから明日作ると返答した後のこと

である。明日必ず作ってあげようと本気で思ってしまったのであって、無視するつもりなど全くなかった。まだ三歳の、こんな小さな子どもが、無視されることの痛みを知っている、そしてその怒りを私にぶつけてきたことに少なからず衝撃を受けた。

二期の最初の日、E子は砂場で、「先生に作ってあげるからね」と私にごちそうを作ってくれた。その後も、度々、E子は「先生だけにあげるんだから」とごちそうを作ってくれたが、「先生なんかにあげないよ」と言い出すことも、またあった。私に親しみを感じる一方で、拒否したくなることもある、E子の心が揺れ動いているのを私は感じた。

年長組になっても、E子は親しみと拒否の両方の気持ちを私に示した。私を全面的に信頼しきれないでいる。

E子は、幼稚園では好きなことを次々にやってきた。友だちや、時にはおとなにさえ強い調子で物を言い、自分の意志を通そうとしてきた。

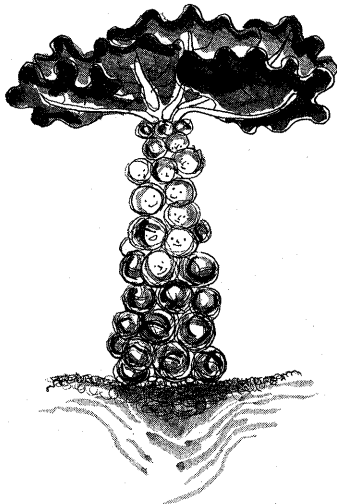
砂や土と水を混ぜてドロドロのごちそうを作る。虫を

追いかけてつかまえる。E子にとっては楽しい体験なのだが、母親には理解してもらえないらしい。

「ママが汚しちゃういけないって言ったの。どうしよう」

「着換えれば大丈夫よ」

「きょうはおけいこがあるから、この服にしたの。だから



らママが汚しちゃいけないって」

「この虫、持って帰りたい」

「いいわよ、どうぞ」

「でも、うちに虫かごないの」

「買っていたらどうか、代わりのものをお母さまと考えてみたら」

「だって、ママが、うちでは飼っちゃいけないって言ったの」

E子は、母親の知らない世界で、新しい価値観に目を開かされてしまった。母親はそれに理解を示さず、強い力でE子の前に立ち塞がる。E子の私への不信任は、母親への不信任なのかも知れない。

四歳の十月、E子は角が二本ある鬼の顔をピンク色で描き、私のところに持ってきた。

「ママの顔なの。先生にあげる。」言うなり外へとび出していった。

五歳の十二月半ば、お弁当の時に私はE子の隣に座った。

「先生はお弁当いつ作るの。夜作るの、朝作るの」

「そうねえ、夜作ることもあるけど、大ていは朝作るわ」

「うちのママはね、夜作るの。それで、外にほっぽっておくんだよ」

私は「ほっぽっておく」ということばに強い衝撃を受け、E子はどんな気持ちでそう言ったのだろうかと思っただ。この時期、幼稚園ではお弁当を暖める。朝冷たくても、食べる頃には程よく暖まる。事情によっては、前晩にお弁当を作ることもあるであろう。傷まないようにと外に出しておくことが必要な場合もあるかも知れない。それにしても、「ほっぽっておく」とE子が表現しないで済むような配慮を母親がしてくれることを、願わずにはいられなかった。

○再び閉じこめられる

二月の半ば、私は廊下のレストランに招かれていた。特製カレーを注文していると、E子が遊戯室から走って

来た。「せんせい、来て。」

四日前から毎日、E子はM子と二人で、遊戯室に家を作っていた。舞台の左端と、脇の長椅子の間（幅数十センチ程）に板を渡し、上が居間、下が寝室である。上の居間は、日によってお祭りの舞台になったり、レストランになったりして、私は毎日客として招かれていた。廊下のレストランのN子がカレーに添えるコップを作ると言うので、私はその間にE子の家に出かけることにした。

きのうまでと同じところに、家はできていた。板の上には何もないので、きょうはどうなるのかなと思いがながら、E子についていく。M子と、一緒にいた女兒三人がみんな、私を見た。「ここにはいつて」とE子は板の下を指した。私は、E子が再び私を閉じこめようとしていることを直観した。そして、きょうはE子の意に従おうと覚悟を決めた。

言われた通り、私は狭い空間に仰向けに身体を滑りこませた。頭の一部が出てしまった。「ちょっと待って

て」と言うと、E子は走っていった。上を塞ぐつもりらしく積木が一つ用意してあったのだが、それでは間に合わなくなって、いろいろ探しにいったらしい。この前のように私に出られたら大変と思うのか、あわてて塞ごうとしている様子が感じられる。

私の頭が全部隠れると、中は真っ暗になった。E子の「やった、やった」と言う声が聞こえてくる。今後は、完全に閉じこめられてしまった。M子や他の女兒はどうしているのか、静かで会話一つ聞こえてこない。床を通して寒さが身体に伝わってくる。

程なく頭上でE子の声がして、明るくなった。「大丈夫、今出してあげるからね。」E子はせっせと積木などを動かして、上半身を出してくれた。私はゆっくりと身体をおこして外に出た。

E子は、私があまりにも素直に閉じこめられてしまった、少し戸惑ったようにみえた。閉じこめてはみたものの、中の様子は見えないし何も聞こえてこないの、心配になって、すぐに出してくれたようである。のぞきこ

んで「大丈夫」と聞いてくれた声には、優しさがこもっていた。

○関係の逆転

私はE子に対し、母親とは異なる価値の体現者でありたいと願い、努力してきたつもりであった。E子も母親と区別して受けとめてくれているものと、疑いもなく思っていた。しかし、E子にとってはそんなに単純に割り切れるものではなかったようだ。権力を押しつける者という点では、親も保育者も似たような存在と映っていたのであろう。

E子は、私との間の、こうした権力関係を乗り越えたかったのではないだろうか。私を封じ込め、支配することができれば、一時的にせよ、権力関係を逆転させることができる。そうして初めて、E子は私を対等な存在として認めることができたのではないか。

再び閉じこめられてから一週間程して、私はE子が素

直に「はい」と言うのを、初めて聞いた。今までは、何か頼むとニッと笑うだけのことが多く、結果を確かめるまでは、それが否か応かほとんどわからなかったし、「はい」という返事には「やればいいんでしょ」というニュアンスがこもっていた。

幼稚園での最後のお弁当の日、私は再びE子に聞かれた。「先生はお弁当いつ作るの。」この前と同じやりとりが繰り返されたが、今度は、E子は「お弁当を外にしておくの」と表現した。そして最後につけ加えた。「その方がおいしくなるんだって。」そのことばに、私はE子が母親を受け入れていることを感じ、よかったと思った。

卒業式の日、並んで座っている子どもたちを前に、私は別れの挨拶をしていた。私の前にいたE子が、突然大声で叫んだ。「せんせい、先生も一緒に小学校に行こう。」私は何よりも嬉しかった。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)